



朱金欄 陣羽織  
百合唐草

一つ紋 林 紺地  
訪問着



鶴見和子  
大正8年生まれ平成18年没

鶴見和子の父は政治家 鶴見祐輔、弟は哲学者 鶴見俊輔、妹の夫は法学者、叔父は外交官、甥は法学者、祖父は初代東京市長の後藤新平と親戚縁者に日本のリベラリストが勢ぞろいする家系に生まれた。鶴見和子自身は学習院卒業後、アメリカに学び米国プリンストン大学院で社会学博士を取得、そのままトロント大学やブリティッシュ



女性村

新聞

vol. 13

2025 Spring

ねぎぼうず

# 『鶴見和子の着物と養蚕文化の部屋』オープン



セレス島刺繍 帯



ジャワ更紗 人形芝居

コロンビアなどで大学教授として教壇に立ち、帰国後は上智大学教授、社会学学者として「国際関係論」などを講義活躍した。一方、歌人、踊り、着物と趣味を広げ、著作や実践に挑戦。着物は365日と言いい、自ら着物で通し、インドのサリーや中国の刺繍を着物や帯、陣羽織などリメイクして、異文化の豊かな出会いを楽しんだ。母方の祖父はかの有名な後藤新平、関東大震災後の東京復興の都市政策、感染症対策など、現在の東京の礎を作った人である。また、女性の仕事として、養蚕文化に力を入れ、養蚕文化の王道として絹

の道を奨励した人でもあった。着物文化、養蚕、絹の道を愛した鶴見和子に一脉通じるものが垣間見える。この度、下仁田ねぎぼうず館に鶴見和子が愛し遺した着物が寄贈された。

着物を通して、布文化の王道と日本の奥深い文化の部屋を披露することになった。鶴見家の鶴見和子の妹 内山章子さん、藤原書店社主 藤原良雄氏、日本文化プロデューサー 笠井賢一氏と着物研究家の中谷比佐子氏のご尽力を頂き春のオープンを目指している。乞うご期待下さいませ。



丸岡秀子様のおばあ様の形見江戸時代のものか



## 下仁田町のかくれたお宝『チャツボミゴケ』を見てみませんか

中之条町のチャツボミゴケ公園(2017年 国の天然記念物指定)と同じコケが下仁田町で見られます。

2017年にチャツボミゴケを紹介して下さったのは地元の方たち。コケの美しさに魅せられ、定期的に見学会を行うようになりました。鉄鉢床のでき方なども現地で紹介させていただきます。



- 開催日時** 令和7年5月10日(土) 10時から昼頃まで
- 集合場所**
- ①南野牧の地元住民集会所(公会堂) 10時  
下仁田町南野牧 8026-1  
駐車場は公会堂手前の道路わき  
下仁田町南野牧8057-7付近の材木置き場空き地
  - ②日帰り温泉荒船の湯(現在休業中)  
R254わきの駐車場に9時45分まで  
ここから移動



- 持ち物:コケの近くまで行きたい方は川を渡りますので、靴をお持ちください。(水量の多い場合は近づけない場合もあります)
- 参加無料 事前申し込み不要  
お問い合わせは090-9807-5329まで
- 荒天の場合は、公会堂にて中丸鉢山・西ノ牧鉢山の鉢物観察。希望者は女性村ねぎぼうずの展示見学、午後に里見哲夫氏の講演も企画されています。

【主催】 ぐんま鉢山研究会  
【共催】 下仁田自然学校 下仁田町自然史館(予定)  
【後援】 女性村 ねぎぼうず(チャツボミゴケから4km程の場所)

## 4月のイベントのご案内

- 【講演】写真家中島英雄  
「一周忌にあたりフジコ・ヘミングを偲んで」  
日時.. 4月6日(日)13:00~  
費用.. 無料※事前のお申込み不要
  - 【鑑定士 浅野美由紀  
「手相鑑定」  
日時.. 4月12日(土)10:00~15:00  
費用.. 1,000円/10分  
(複数人での利用については加算の可能性あります)  
※事前のお申込み必要
  - 【高橋美清  
「尼僧による青空説法」  
日時.. 4月12日(土)13:00~14:00  
費用.. 無料※事前のお申込み不要
  - 【植物学者 里見哲夫  
「遊びと学びの自然教室」  
日時.. 4月19日(土)13:00~  
費用.. 無料※事前のお申込み不要(ぐんま鉢山研究会ご協力)
  - 【多田欣也  
「ガーデニング教室」〜春の花の寄せ植え〜  
日時.. 4月19日(土)11:00~  
費用.. 有料(詳細はお問合せください)※事前のお申込み必要  
※所要時間1時間半程度を予定しています。作った寄せ植えはお持ち帰りいただけます。
  - 【相川厚 教授  
「生き生き健康講座」  
日時.. 4月26日(土)11:00~12:00  
費用.. 無料※事前のお申込み不要
- 女性村ねぎぼうずは、3月より土日祝オープンしています。  
最新のイベント情報はホームページ、SNSで確認ください。

お申込みお問合せ先 NPO法人 日本子守唄協会事務局  
TEL:03-6458-0283 FAX:03-6458-0284 E-mail:info@komoriuta.jp  
https://www.komoriuta.jp/ HPはこちら→





# フジコさんと 絵画

蘭 日出哉  
作家・アリス動物病院院長

世界的ピアニスト、フジコ・ヘミングさんが亡くなってから間もなく一年となります。生前、何度か彼女のコンサートに向いて、ショパン、リスト、ドビュッシーなどの曲を生演奏で聴くことができたことが、今では私の心の財産となっています。きっと私だけでなく、多くのフジコ・ファンたちが同じ思いを抱いていることを確信しています。

フジコさんがステージに登場して中央に歩み寄り、ピアノの鍵盤の端に左手をかけて一礼し、優しい眼差しで聴衆をぐるりと見渡す姿が思い出されます。また、フジコさんの弟であるウルフさんがお元気だった頃には、フジコさんの演奏が一曲終わる毎に客席の後方から「ブラボー」と彼女に声を掛けていたのがとても印象的でした。フジコさんはある意味クラシック音楽界のアイドルのような存在であったと言えるのかもしれませんが、フジコさんのコンサートに出かけると、いつも会場のロビーに彼女が描いた絵画が何点か

展示されています。

「フジコさんは絵を描くのも好きなんだな」と思いながらそれらを眺めていました。フジコさんに関する本によると、彼女の父親が建築デザイナーをしてい



た影響もあって、子供の頃から絵を描くことに慣れ親しんでいたようです。作品集などでフジコさんが描く絵を観ると、彼女が描くモチーフは大方四つに分類されることに気づきました。それは『自身の思い出』『猫』『花』そして『友人』です。どの絵も自由奔放な構図と色遣いで、セオリーに囚われないフジコさんの性格がよく表れているように感じられます。

『自身の思い出』は子供の頃の弟さんとの思い出、お母さんとの思い出、ヨーロッパで生活していた時代の思い出などが描かれています。『猫』については言うまでもありません。フジコさんが無類の猫好きだったことは有名です。彼女と共に暮らしていた歴代の猫たちを表情豊かに描いています。『花』の絵は主にヨーロッパ時代に描かれたものが多く、それらはみな明るく華やかな色遣いで表現されています。耳が聴こえなくなるとピアノを諦めかけた時に、絵を描くことが一番の慰めだったと彼女の著書にも記されています。心が暗くなりそうな時に、取返して明るい

絵を描こうと心がけていたのかも知れません。『友人』はフジコさんがヨーロッパで暮らしていた時の友だちです。音楽家やピアノの生徒などを描いたものが多く、そのほとんどの絵の中に猫や犬、そして小鳥などの動物たちが一緒に登場しています。また、日本に帰国してからは絵本の挿絵なども手掛けていて、可愛い少女の姿なども描いています。

私は八年ほど前に自宅の隣に私設の絵画ギャラリーを開設して、叔父が生前に描いた絵を展示していました。趣味の世界なのでそれだけでも充分だったのですが、だんだん他の人の絵も飾ってみたいという思いが増してきました。そんな時に思い浮かんだのがコンサート会場や作品集で目に触れたフジコさんの絵画でした。幸い数多くの絵が原画を基にした版画として世に出ています。何点か購入してギャラリーに飾ってみると、



から寄贈されたピアノの演奏会を開催」という記事が載っているのを目にしました。そしてその場所が下仁田町の廃校になった小学校であることに驚きました。なぜそこにフジコさんのピアノが？という思いを抱きつつその演奏会に出かけました。そのピアノはフジコさんが若い頃から苦楽を共にしてきたもので、とても温か味のある音を奏でていました。ピアノが置かれた教室は『フジコの部屋』と名付けられていました。

素敵な演奏会の後、協会の西館理事長に「フジコの部屋で絵画展を開きませんか？」と提案してみると、「ぜひやりましょう」と快く受け入れていただきました。そして翌年のゴールデンウィーク期間中に『フジコ・ヘミング絵画展』を開催すると、県内外から多くの人たちが会場に足を運んでくれました。

西館理事長が下仁田

叔父の絵と同じ空間に同居しても全く違和感がありませんでした。テクニックよりも『心の表現』に重きを置くという共通の特徴で二人の絵は結ばれているように感じられました。その後だんだんとフジコさんの絵が増えていき、気がつくとも六〇点ほどになっていました。

そんな折、二〇二二年十一月の新聞に、『日本守唄協会の主催でフジコ・ヘミングさん

で活動を始め、そこにフジコさんのピアノが来て、さらにフジコさんの絵画展を開催できたことは単なる偶然の積み重ねだったのでしょうか。何だかピアノ自身が彼女(あるいは彼)の意思で下仁田の地にやって来たような、そして絵画たちを呼び寄せたような、そんな気がしてなりません。偶然なのか必然なのか、縁とはとても不思議なものであると思います。

## 一粒の涙

上原 孝子  
手しごとや主宰



今から60年も前、私が大学生のときだった。母は小学校の教員をしており、運動会の前晩、美容院に行き、直ぐに妹の運転するバイクに乗って帰宅した。家に着くなり、崩れるように倒れたという。すぐに私の下宿に連絡が入り、私は前橋からタクシーで駆けつけた。日ごろから母の血圧の高いことは知っていたが、まさか、という思いがよぎり、道中気がかりで胸が張り裂けそうにドキドキした。母は眠り続け、私は枕元で、1週間あまり着替えもせずただ見守った。2カ月近くたって、幸い日常生活は出来る程に回復したが、仕事を続ける状態ではなく、教員を退職せざるを得なかった。母が58歳の時だった。

起き上がれるようになると、母は書の練習をしたり、花づくりをするまでになって、それなり日常を取り戻すことができるようになった。学生生活を送る私に、週一度は必ず毛筆で書かれた手紙が届き、その都度、不自由な手で書く母の姿を思い浮かべ、泣きながら返事を書いたことが何度あったことだろう。

私はその後、母と同じ教職に就き、母が咲かせてくれる花々を教室に飾り、何とか平穏な日々が続いた。母の手足は不自由だったが前向きに生活しているとほっとしたのもつかの間、2度目の発作が起きた。最初の発作から四年後の事だった。1月の寒い朝空は真っ青、冷たい風が音を立てて吹いていた。母は静かに亡くなった。

母の唇に紅を指しながら小さな声で「ありがとう」と言っていた。その時、母の目から一粒の涙がこぼれた。何を、何を伝えたかったのだろうか。

この一粒の涙が、母との永遠の別れとなった。

ねぎぼうず館1Fにて上原孝子さんの着物リメイクの数々を展示販売しています。

## 遠野今昔 人さらいとモッコ

作家・画家・グリーンコーディネーター  
多田 欣也

「なんたらはっぱり(全然)言うことがねわらずだ」母ちゃんは私が学校から帰ると末っ子の私にだけいつもお使いを言いつけます「やんた(いやだ)漫画よみたいも」と断るといつも怒られるわけで「お前なんか、早瀬の橋の下から拾ってこんねばがった、あー失敗した」と真顔でいいます。それは怒るたびに違うのですが、流れてきたのは来内川だったり早瀬川だったりするわけです、拾ったことだけは確かかなようで「嘘だべ」と思いながらも少年の心は「拾いっ子」なんだと傷つくわけです。さらに別の日、自分が生んだと認めるものの、三人続いての男だったから産婆さんに頼んですぐ殺して死産だったことにしようと思つたと、さらに残酷なことを言うのです。しかし「んでも顔を見たらかわいかったから止めたんだ」と、フオローになるかならないかのようなことを言う母親でした。次の日学校でそのことを言うと「オラも言われた、私も言われた」と、被害者はいっぱいいたのです。

夕方暗くなっても外で遊んでなかなか帰ってこないという暗くなつても外で遊んでいる人さらいにさらわれるんだ」と脅されます。言うことを聞かなければ「サーカスに売ること」とまでいわれ、あそこはそういう子供ばかりを集めてすごく厳しく鍛えて芸をさせるんだそうです。失敗すればムチで打たれて、ご飯も食べさせてくれない怖いところなのだ。とにかく夜の遠野は人さらいや怖い人たちがいっぱい、妖怪やお化けもいっぱいいるんだから、早く家に帰るもんだと怒られるのです。

また夜に早く寝ないと「山からモッコくるぞ！早く寝ろ」モッコとは蒙古のことで大昔の蒙古襲来の名残のようです。わけもわからず怖くて布団に潜り込むのですが、幼い子供には良く効いたようです。

鍋倉山では「オッホーオッホー」とフクロウが鳴き長い長い夜は恐ろしいのです。

画 多田 欣也

